



～沖縄での環境にやさしい農業の実現に向けて～



内閣府 沖縄総合事務局 農林水産部



～はじめに～

環境にやさしい農業について、「有機農業（有機JAS）」、「オーガニック」などと聞くと、高いハードルを感じてしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、化学農薬・化学肥料を使用するとしても、必要最低限を意識しその量を減らすことで、「特別栽培農産物」又は「エコファーマー」の認証を取得することができます。環境に配慮した形で生産された農産物は他の農産物との差別化を図ることができるだけでなく、化学農薬・化学肥料の使用量が減ることで、栽培にかかるコストの削減にもつながります。

本資料は、より多くの方に環境にやさしい農業に興味を持っていただくため、「特別栽培農産物」又は「エコファーマー」の認証を取得されている方やその取得を目指している方、そして有機農産物を取扱っている店舗の方の取組・声をご紹介します。

<目次>

大保 正樹氏（エコファーマー認定取得、糸満市）	2
儀間 恭昇氏（環境負荷低減に取り組む農家、読谷村）	3
森井農園（エコファーマー認定取得、石垣市）	4
ぴりなファーム（沖縄県特別栽培農産物認証取得、宜野座村）	5
識名農園（有機JAS認証取得、うるま市）	6
おきなわオーガニック産地育成協議会	7
土どう宝協議会（南風原町）	7
沖縄協同青果株式会社（浦添市）	8
オーガニック市場てんぶす（沖縄市・那覇市）	9
浮島ガーデン（那覇市）	10

エコファーマー認定農家
大保 正樹 氏
場所：沖縄県糸満市

エコファーマー
認定農家に
聞きました
①

取材日：R5.12.6（水）

取組概要

《取扱品目》 ピーマン、にんじん

天敵資材（スワルスキーガブリダニ剤）や緑肥（ベチバー等）を活用して減化学農薬、減化学肥料の野菜栽培を実践し、沖縄県の「エコファーマー」認定を取得。



ピーマンほ場



スワルスキーガブリダニ
の付着した葉

また、出荷先のニーズに応えるため、各栽培作業について記録、点検等を行う**GAP（農業生産工程管理）**に取り組んでいる。

現状と課題

○天敵を利用した防除について

- ・天敵の増殖効果がある「クレオメ」をほ場周辺で栽培し、効率的な防除を実施。
- ・天敵資材は高額であり、使用量に注意が必要だが、適正使用で生産コスト削減につながる。



ほ場の隅に植えられた
クレオメ

普及に向けて

○環境にやさしい農業を広げるためには

- ・減農薬、減化学肥料と慣行栽培の販売価格がほとんど変わらないため、「エコファーマー」などの認知度が高まり、付加価値を感じられるようになって欲しい。
- ・これからの時代を担う若者が、**環境に配慮した農業へ取り組みやすくなるような支援**が必要。



環境負荷低減に取り組む農家
儀間恭昇 氏
場所：沖縄県読谷村

環境負荷低減に
取り組む農家に
聞きました

取材日：R6.12.18（水）

取組概要

《取扱品目》

露地：にんじん、さとうきび
（ほか小規模で野菜を栽培）



さとうきび畑の見学時の様子



にんじん散水の様子

- ・健康維持や経費削減を目的に、化学農薬及び化学肥料を削減した栽培方法に取り組む。

【取組のポイント】

・土壌の地力管理

同じ農地でも時期で品目を変えて栽培することで地力を保持

・有機質肥料の活用

化学肥料は最小限の使用にとどめ、緑肥（クロタラリア）、鶏糞堆肥、米ぬか等を活用

・手作業による防除

化学農薬を極力使用しないよう、管理が行き届く範囲の面積で、丁寧に虫取りや草刈り等の栽培管理を実施

現状と課題

○反収の増加

- ・有機質肥料の活用によりにんじんの反収が地域農家の平均と比べて約1.6倍と、収益性も向上（反収平均2,479kgに対し、4,163kg）

○化学農薬・化学肥料使用量の削減

- ・にんじんは、慣行農業と比較して、化学肥料使用量は5割減、化学農薬使用量は8割減
- ・さとうきびは、化学農薬不使用。雑草が成長する前に定期的に耕起することで雑草を抑制

○販売量が少ないためエコファーマー等未取得

- ・規格を取得したとしても現在の生産規模では売上の増加が見込めないため未取得

普及に向けて

○環境にやさしい農業を広めるために必要なこと

- ・子どもたち（幼稚園生や小学生）が**有機農業等で生産された農産物を食べる機会（農業体験や学校給食等）を増やす**こと。子が親に有機野菜が食べたいと言うことで購入機会に繋がる。
- ・**地元ラジオなどローカルメディアに働きかけ、積極的にPRしてもらう。**

エコファーマー認定農家
森井農園 代表 森井 拓光 氏
場所：沖縄県石垣市

エコファーマー
認定農家に
聞きました
②

現状と課題

○慣行栽培と比較して

- ・現状ではエコファーマーであることが付加価値となっている実感はない。認定＝単価UPではない。

○費用や労力

- ・強い薬が使えないため細やかな管理が必要があり、人件費や労力を要する。

取組概要

取材日：R5.12.19（火）

《取扱品目》

ハウス：ゴーヤ、ナス、
トマト、キュウリ
露地：かぼちゃ、かんしょ、
ショウガ、トウガラシ、らっきょう



- ・お父様の代から農業に従事し、現在は独立した経営体として営農。
- ・化学肥料の使用量を減らすため、肥料として木製チップ、米ぬか、粃殻、燐炭を使用。
- ・ハウス栽培、マルチ栽培を行うことで病害虫や雑草の影響を押さえ、化学農薬の使用量を低減。



＜きっかけ＞

環境にやさしい農業に興味があったところ、補助事業でハウスを設置できることになった！



普及に向けて

○環境にやさしい農業を広げるためには

・慣行栽培との差別化

- ・状況に応じた使用を可能とする、有機肥料やB T剤（微生物を活用した農薬）の種類の多様化
- ・ファーマーズマーケットでの**エコファーマー認証のポップ**掲示や農作物への**エコファーマーのシール**貼付による、消費者への認知促進と情報の発信



沖縄県特別栽培農産物認証取得農家
ぴりなファーム 代表 林 真弘 氏
場所：沖縄県宜野座村

特別栽培認証
農家に
聞きました

取組概要

取材日：R5.11.29（水）

《取扱品目》

マンゴー、ミニトマト、
パッションフルーツ

- ・ 10年前に沖縄に移住し農業をスタート。
- ・ **BLOF理論**（生態系調和型農業理論）に基づく栽培を行うなかで無駄を減らしていった結果、化学農薬・化学肥料使用量を慣行栽培の5割以下に削減。
- ・ バガスやトラッシュ等の植物性堆肥を主に使用し、あわせてミネラル分を多く投入。
- ・ 病虫害への対処法は、主に天敵（生物）農薬を使用。
 - ▶ マンゴー
⇒スワルスキーカブリダニ
 - ▶ ミニトマト⇒タバコカスミカメ

<ポイント>

- ・ 適切なタイミングで農薬を使用することにより、農薬の使用量低減が可能。



現状と課題

○慣行栽培との差別化について

- ・ 数年かけてリピーターを獲得したこともあり、相場の変動に左右されない再生産可能な価格帯に設定しながらも、売れ行きは上々！

○周囲の生産者の取組状況について

- ・ 環境にやさしい農業に取り組んでいる生産者は増加している。
- ・ 宜野座村（自治体）が「ぎのぎ型エコ農業」を推進していることもあり、エコファーマーが多い印象。

普及に向けて

○有機農業を広げるために必要なこと

- ・ 有機農産物認証制度の**認知度アップ**
- ・ 亜熱帯海洋性気候における**病虫害対策**
- ・ 有機農産物の**品質向上（生産技術の高度化）**
- ・ 生産コストに見合った有機農産物の**適正な価格形成**

有機JAS認証農家
識名農園（識名 共史 氏）
場所：沖縄県うるま市

有機JAS
認証農家に
聞きました

取材日：R5.12.11（月）

取組概要

《取扱品目》

ハウス：トマト、ミニトマト、インゲン

露地：こまつな、サラダカラシナ、リーフレタス、
ほうれんそう、タマレタス、ネギ、ダイコンバ

- ・うるま市で有機栽培（面積150a）を行っており、（有）真南風を通して、県外の消費者に有機農産物を販売。
- ・県内に向けては、うるマルシェ等で販売。
※有機JASは、（有）真南風の団体認証により取得。

【取組のポイント】

- ・ **物理的防除**
（防虫ネットやトンネル栽培）
- ・ **独自の有機肥料**
- ・ **消費者の有機農産物収穫体験**

→有機栽培を進めていくことで、
自然に生態系が形成され、**害虫の繁殖が抑えられる**ことを発見！



現状と課題

○取引先の増加

- ・有機農産物の取扱いにより取引先が増えた。冬場の有機野菜は県外からの需要が多い。

○経営の安定化

- ・独自の有機肥料を利用することで、化学肥料の価格高騰の影響を受けない。

○有機農家が少ない

- ・県内の有機農家が少なく出荷の規模が小さいため需要に応えきれない。

○栽培に手間がかかる

- ・化学農薬・化学肥料を使用していない分、管理の手間がかかり、人件費、労力がかさむ。

普及に向けて

○有機農産物について知ってもらう

- ・県内の消費者との交流を通じて、有機栽培についての理解を深めてもらうことが必要。

○県外の需要に応える

- ・有機農家を集めて出荷団体を作り、県外の需要に応えられる体制を整える必要がある。

○誰でもできるようなマニュアル作成

- ・人手不足が深刻化する中で、誰でもできるように作業をマニュアル化し、より簡単にできるようにしていきたい。

おきなわオーガニック産地育成協議会

(有機農業推進総合対策事業活用)

補助事業者に
聞きました
①

取組概要

取材日：R6.1.12（金）

《取組品目》 バナナ（キャベンディッシュ系）

沖縄県産有機農産物の生産力向上及び供給体制の構築を目指し、研修会やオーガニックライフEXPOへの出展、オーガニックエコフェスタ（栄養価コンテスト）への出品を実施。



EXPO出展の様子

普及に向けて

○有機農業に取り組むメリット

・ **資材高騰の影響を受けにくい**

○有機農業の理解増進に向けて必要なこと

- ・ 消費者が分かりやすい **認証制度へ整理**
- ・ 慣行農業との作業体系の違いなどに関する **農業教育**
- ・ 「今日は〇〇の日だから有機農産物を食べよう♪」
といった **購買意欲を高める動機付けの推進**

○みどり戦略の目標「耕地面積に占める有機農業の割合100万ha」達成に必要なこと

- ・ 有機農業で利用できる **栽培技術の開発**
- ・ 販売促進等の **出口戦略**に関する支援

土どう宝協議会（南風原町）

(みどりの食料システム戦略緊急対策交付金のうち
グリーンな栽培体系への転換サポート活用)

補助事業者に
聞きました
②

取組概要

取材日：R5.12.5（金）

《取扱品目》 キュウリ

BLOF理論（生態系調和型農業理論）に関する研修を実施し、土壌診断、太陽熱養生処理、納豆菌・酵母菌の活用など、減農薬、減化学肥料につながる取組を実践。



栽培実証の様子

普及に向けて

○減農薬・減化学肥料を実践するメリット

- ・ 減農薬の取組を行うことで、薬剤散布作業の **重労働から解放** されることは大きな利点。

○取組のきっかけ

- ・ 「有機」という点にそこまでこだわりはなかったが、これまでの栽培手法では上手いかなと感じたときに、土壌診断を活用し減農薬、減化学肥料の新しい方法を試してみようと考えた。

沖縄県産中央卸売市場卸売業者 沖縄協同青果 株式会社

場所：沖縄県浦添市伊奈武瀬1-11-1

青果物
物流事業者
に
聞きました

取材日：R5.11.29（水）

取組概要

- ・ 沖縄県中央卸売市場において、有機農産物を取り扱っている。県内産は、沖縄県と連携して実施しているオーガニック産地育成事業による「バナナ」のみ。
- ・ 県内小売店から流れてくる分を、卸売市場にて売買。
- ・ 県外産の取扱いは、主に「ジャガイモ、タマネギ、にんじん」。



<ポイント>

【有機農産物を取り扱う理由】

- ・ 県内産の「バナナ」は、生産者から安定的な供給があるため。
- ・ 県外産の「ジャガイモ、タマネギ、にんじん」は、バイヤーから一定程度の需要があるため。

○県内産について

- ・ バナナは風に弱く傷み物は一房ごとに除去。
- ・ 有機農産物の生産体制が未確立。
- ・ 他の品目についても安定的に入荷されることを強く要望。

○県外産について

- ・ 物流で時間がかかるため日持ちする農作物のみ。
- ・ 小ロットでの取引で輸送コストが高く、また品質管理も厳しく、一部の取扱いにとどまっている。
- ・ 慣行栽培の農産物と比較すると割高で取引。

○卸売業者として

- ・ 一週間あたり10ケース（8 kg/ケース）仕入れているが、卸売市場の総量からするとまだまだ少量である。
- ・ 需要は増加傾向にあるため、供給量を確保したい。

普及に向けて

○卸売市場における有機農産物取扱の拡大に向けて

- ・ 有機農産物の**生産量増加**及び**品質の安定化**

○望まれる施策

- ・ 研究機関における**研究成果の周知、生産施設整備に係る補助事業の拡充、認証の簡素化、価格補填**
- ・ 他県と異なり風が強く虫も多いため、**沖縄特有の支援策**

取材日：R5.12.4（月）

取組概要

県内2か所（泡瀬本店、那覇店）で有機農産物、有機加工食品及び有機農産物・特別栽培農産物を使用したお弁当、惣菜などを販売。



〈取組のポイント〉

- ・生産者による販売価格の設定
- ・福岡県産の醤油や味噌などをオリジナルパッケージでプロデュース
- ・取扱品目にバリエーションを出すため、県内、県外の気候の違いを利用した有機農産物を調達
- ・大手スーパーが仕入れにくい生産者・加工業者こだわりの商品などの積極的な仕入れ



現状と課題

○消費者が有機農産物に関心を持ったと感じるタイミング

- ・赤ちゃんが生まれたとき
- ・体の調子が悪いとき
- ・家族が病気になったとき

○有機農産物取扱いに関して

- ・1か所からの入荷量が限られることから、複数か所からの仕入れなどが必要であり、**送料負担が大きい。**

○有機農産物購入の負担感

- ・購入者の6割ほどがリピーターであり、生活に無理のない範囲で取り入れてくれている。

普及に向けて

○集出荷場の設置

- ・県内の有機農産物に関しても、集積する場所や業者があれば、県外業者からの発注等の利用が増え、販売先確保への不安が減るのではないか。

○所得増に向け戦略の幅を広げること

- ・土づくりにこだわっている方も多いと思う。家庭菜園や観葉植物用に袋詰めした土を販売するなど、農産物とは別の収入源を確保することができれば、安心して有機農業に取り組めるのではないか。

浮島ガーデン

場所：沖縄県那覇市松尾2丁目12-3

飲食店に
聞きました

取材日：R6.1.15（月）

取組概要

県産有機農産物を利用した料理を提供するお店の展開や冷凍食品などの加工品の製造・販売を行う。



〈取組のポイント〉

・仕入れは本島（西原町等）や離島（竹富町等）の有機農業者のもとへ**自ら足を運んでルートを開拓。**

・**地域支援型農業（CSA）**にも取り組む。

※ 消費者と生産者が連携し、前払いによる農産物契約を通じて、相互に支えあう仕組み

・沖縄県内の有機農業の普及・支援に向けて活動中。



現状と課題

○仕入れ時の状態

・仕入れている有機農産物は加工調理するので、形質はそこまで気にならず、問題なく利用できている。

○消費者の意識

・健康だけでなく、環境への問題等を考え、有機農産物を選ぶ消費者が増えている。

○有機野菜が少ない

・県内の有機農産物は量が少なく、仕入れに苦労。

○送料の高騰

・輸送費高騰の影響で送料が上がり、離島及び県外からの仕入れ値が高くなっている。

○環境の変化

・気候変動に伴い、地域によっては収量が大きく減少しているのではないかな。

普及に向けて

○有機栽培を広げるためには

・有機農産物を生産する**小規模農家を守る支援**（特に機械の補助）が必要。

・有機栽培に挑戦するためには、勇気がいる。農家の生活を支援する事業があったら良いと思う。

○今後の自社の取組について

・有機農産物の加工に力を入れていき、環境意識などが高い**海外に向けた輸出**を検討。